



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.224

2022.5.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— 山内清男生誕120周年に向けて —

鈴木 正博

● 第45回 ● 『日本原始工芸』の衝撃と山内清男

加曾利B式制定の頃、「コロボックル考古学」に新たな兆候が窺える。「コロボックル考古学」は基礎的調査として列島の石器時代資料を蒐集、『日本石器時代人民遺物発見地名表』改訂を重ね、画工を伴い『人類学雑誌』等に資料の公開と活用を定着させると共に、全国各地の遺蹟研究や資料収蔵動向等も収録する等、日本考古学の近代化推進に強力な学術基盤を構築する。

と同時に「コロボックル風俗考」等パブリック・アーケオロジーの普及にも邁進し、人類学教室蒐集資料に留まらず、好事家達による発掘も列島各地で盛んに行われ、宝ヶ峯遺蹟等遺物の蒐集と保管にも努力が払われた結果、特に亀ヶ岡式と加曾利B式については東日本各地で保管された個人所蔵完形土器等は質量共に想像を遥かに超えて存在する。これらの膨大な完形土器等は層別別調査には疎いものの形態・装飾には特筆すべき逸品が多く、「コロボックル考古学」は実践的形態学の手引きとなり、再び坪井正五郎が脚光を浴びる。

杉山寿栄男は大野雲外とは経歴を異にする図案家として坪井正五郎の理論考古学による模様原型解釈を批判しつつも、「原始文様」への接近法である「コロボックル考古学」を「実に複雑極る東北地方の原始文様を通観整理して、以て一脈の連絡のある事を発見され、而も、首尾は傾倒していても兎も角も之を順序正しく配列されておるのであります。当時に於て、殆ど何人も企て及ばなかったこの種の事業を、よくこれまでに築き上げられたと云ふ事は、実に敬服に耐へないのであります。」(杉山寿栄男(1926)「原始文様に関する一二の私見」『人類学雑誌』第41巻第7号、ゴチック体は引用者)と評価する。こうした批判的継承に臨んだ杉山寿栄男は「コロボックル考古学」の新機軸として全貌が伺える土器群の全国規模データベース構築を企図、図案化し類別する「原始文様」に新たな可能性を求め、『原始文様集』(1924)を始め、「原始文様」論が成就するのは昭和3年2月刊行の杉山寿栄男編(1928工業美術研究会・1976北海道出版企画センター復刻版)『日本原始工芸』である。

『日本原始工芸』の衝撃は、第一に浜田耕作・長谷部言人・高橋健自・喜田貞吉・関野貞の編集顧問、序の大山柏を始めとし、資料を収蔵する各大学関係者・個人、出版を援助した本山彦一等の鳴り物入りに加え、当時の考古学研究者を関係者とするデータベースとしての信憑性の誇示にあり、第二は山内清男も含め今日でも活用される「図版及挿図二千枚余点は、何れも公私の珍藏中より更に真の逸品を集め周匝網羅したもので、地理的には台湾九州より樺太の遠きにも及び、尚ほ各品目には一々その観察所見を述べ、原始工芸を理解し得るやうに蒐集した。」との唯一無二となるデータベースの充実性にある。杉山寿栄男の『日本原始工芸』は、「コロボックル考古学」を継承して全国の資料を集大成し、図案化し類別する「原始文様」論へと到達する。

一方、山内清男は大正13年以来、長谷部言人の下で東北地方を中心に「繊維土器」から「亀ヶ岡式」に至るまで地点別層別別土器群の抽出に成功する。『日本原始工芸』の翌年には満を持して「縄紋土器」に「土器型式」概念を創設し、「繊維土器」の層位を層別別追求による最古の階梯として導出すると共に、「繊維土器」の形態や「繊維土器諸型式の装飾」から「小別」の認定、及び「文様帯」としての「第一次文様帯」の性質から関東以北への連続までも展望する(山内清男(1929)「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第1巻2号)。

『日本原始工芸』が「原始文様」論の中心に据えない土器群こそが「繊維土器」である。現下の学術的重要性から「縄紋土器」最古の階梯を追求する目的が設定され、先史考古学の方法として各地で「小別」層位の解明を進め、「円筒土器下層式」諸型式や「大木式」諸型式等を導出、「装飾は型式によって異なる。」と結論する。更に各地の装飾を比較し、「第一次文様帯」の性質が導出・展望されるや、「縄紋土器文様の歴史」との方法論的認識の下で最古への遡源性追求方法は「原始文様」ではなく、「第一次文様帯」への接近とする。併せて人類学教室の中谷治宇二郎

に対しても「土器形式の内容の正しい識別、及び層位による秩序を考慮しない形式学なるものは、少なくとも多数の階程を有する縄紋式土器の時期の諸遺物に関する限り、僥倖を頼まねばならないであろう。」(山内清男(1929)「文献 J. Nakaya : A Study of the Stone Age Remains of Japan. I.」『史前学雑誌』第1巻3号)と苦言を呈しつつ、関東地方でも「繊維土器」や前後の「土器型式」を連続と制定する(山内清男(1930)「繊維土器に就いて 追加第三」『史前学雑誌』第2巻3号)。

但し、地方別に多数の「土器型式」が変遷する編年学は先学にとっての理解の範囲外となり、正当な評価は不能となる(浜田耕作(1929)「日本の古代土器」『史前学雑誌』第1巻4号)。

『日本原始工芸』を華々しく飾る「原始文様」は「亀ヶ岡式」である。大正14年の大洞貝塚発掘調査は、長谷部言人の人骨蒐集を目的に現地専従の山内清男と共にB地点(大洞東貝塚)、C地点(大洞南貝塚)、A・A'地点(大洞西貝塚)を対象として実施し、地点別の層位的主体土器群から「大洞C式」や「大洞A式」等が命名される(長谷部言人(1925)「陸前大洞貝塚(発掘)調査所見」『人類学雑誌』第40巻第10号)。

その後昭和5年に山内清男は地点別主体土器群の形態と装飾に「系統的発達」を見出し、年代別シーケンスとして模式図を取り入れた「文様帯変遷論」を導出し、6階段「細別」(大洞B式→大洞BC式→大洞C1式→大洞C2式→大洞A式→大洞A'式)から年代構成される「大洞式編年」を樹立するが、関東・東海・中部地方における分布の策定には『日本原始工芸』の役割も大きい(山内清男(1930)「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号)。

山内清男による加曾利B式制定の最中、「原始文様」を「入組紋」・「工字紋」等の文様図案分類に観る杉山寿栄男も、大森貝塚の土器群と関東地方の貝塚地帯に分布する共通な土器群を新たに選定・分類し、特殊な形態に着目した類別を以て「大森式」の再制定に意義を見出す。

*巻頭連載は隔月です。次回は中谷治宇二郎さんです。

目次

■加曾利B式土器 『日本原始工芸』の衝撃と山内清男(第45回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第38回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイパレット・サイト(第217回) 岩永祐貴 …3
■考古学者の書棚 『縄文土器の技法』 橋口 豊 …4

考 古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第38回) 問壁 忠彦・問壁 葎子

8. 奈良三彩薬壺形土器の大と小(2)

今回問題としている三彩壺を倉敷考古館に展示した、近い頃だったとおもう。国立の博物館に勤める親しい友人が館に立ち寄った。こうした友人は、友人の顔と共に展示品に会いたいという気持ちの強いことは、私たちも同様。

館内を見た彼は、近年加わった三彩壺も見つけていた。決して皮肉ではなく驚いた顔で『国の重要文化財指定の物に、『国指定』の表示のない博物館はじめてみたようだ』と言った。私たちは意識的にしたことではない。国重文の重みをつい忘れていた。同じケース内の小形陶棺も他の火葬骨蔵器も、三彩壺も、同様の意味と価値を持つことを重視して説明はしていた。だが多くの人に見て理解してもらうには、『国指定重要文化財』は重要な表示。これはすぐに加えた。

この話題となって、肝心の本資料について、具体的な発見時の実態や価値に何も触れていない。同じケース内に並ぶ、同じ奈良時代の薬壺形の火葬骨蔵器だが、須恵質の物は、岡山県では目にすることも多いが、大形の三彩は初めて、というよりこの日本製の三彩薬壺形大壺は、全国的に発見例が極めて少なく本例を加えても、完形品は6点ばかり、しかも奈良時代という古代の遺物にもかかわらず、保存の良さと美しさがあり、この点も評価されての国重文指定なのである。

問題の壺は、岡山県出土とは先回触れたが、木箱入りであり、箱の蓋裏に、かなり詳しい由来が書かれていた。考古館に譲られた所蔵者の方によると、この資料は、太平洋戦争直後頃、かつて壺の箱を作り、箱書きした本人より譲り受けたもの。以来人目に触れることもなくそのまま所蔵されたとのことだった。箱とその箱書きは、中の壺に関してのものであることは、他の付属物からも間違いないものだった。

箱書きの概要は「明治37(1904)年頃作州津山付近で、鉢山試掘の際、古墳から掘り出したもの。共に陶棺、金環・銀環・勾玉も掘り出す。同地中学校教師A氏は壺を贖い珍藏していたが、ついに余が譲り受けた。陶棺は、当地の中学校に貰い今も保存している。この壺と同様のものが他にも一個あったとか、発掘のさい破壊という。A氏は慶應義塾同窓の人。後人の為に由来をしるす。大正五年六月二十七日 北川南蛮王記。」内容は今少し文語調で、当時の文体を思わす。

A氏については、「当地の中学校」である現在の津山高校の記録から、間違いなく明治38(1905)3月から大正3(1914)年9月まで、当校の教師。彼は赴任した早々、発見されて話題となっていた三彩壺の価値を知り入手、同時出土の陶棺は、中学校で引き取ったのであろう。退職後千葉県あたりに帰郷されたという。しかし中学で保管の筈の陶棺は、当校には何の記録も、記憶も残されていなかった。壺は譲られて後40年近く人目に触れることなく所蔵されていたのだ。

古墳時代後期の研究者であれば、陶棺と聞くと、まず岡山県を思い出すのでなければ、もぐりといわれるのでは…と言うくらい全国での陶棺出土例の7割以上は岡山県出土であり、しかもその7~8割は津山を中心とした美作地方なのである。明治

時代、急速に山地の開発が進んださい、美作の当地では、古代人の棺と知れる陶棺に遭遇することが多く、当事者はその処置に困惑していたのではなからうか。壺を譲る条件に陶棺引き取りがあったのではとも想像される。先の箱書きによると、A氏退職時までは学校に保存されていたようだが、その後の陶棺の行方は全く分からなかった。ここで少々陶棺にこだわった事は、後に今一度思い出していたくためなのである。

ところでこの種の壺の方で小型のものは、各地で知られている。岡山県では先に見た大飛鳥遺跡で、少なくとも10数例は出土していた。県内には古くから、今一つ三彩小壺も出土の注目すべき著明遺跡がある。県東部の備前地区で、最高の熊山山頂の段状石積遺跡中の1基である。

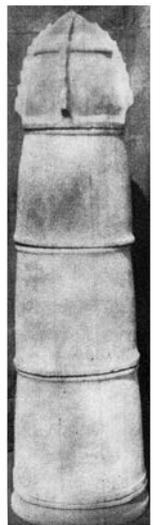
この遺跡は今では、ネットで見ても概要は知られる国指定史跡だが、出土の三彩小壺は、盗難とのこと。岡山県では古くから知られた『吉備考古』86号(1958年7月)に熊山遺跡の特集があり、その時の大本琢壽氏の写真による図版が、小壺の残された唯一の証明である。ここにその図版そのままの一部を縮小し、出土状況の参考にしたい。

■岡山県赤磐市熊山遺跡

(『吉備考古 86号』1956/7の図版より)



岩盤加工の11m長の基壇上に、3段石積。最下段方一辺約8m全高約3.5m。上段中央から竅穴があり、中から右図の5点組み合わせ筒形須恵器と、筒形品中から下図左端の三彩小壺を出土。筒形品は全高約165cm 天理参考館蔵。小壺胴直径約4cmか所在不明。現在残るのはこの写真のみ。



問壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年 同上館長
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

問壁葎子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 217

馬場平遺跡 ～山梨県甲州市～

岩永 祐貴

私が紹介する遺跡は、山梨県甲州市に所在する馬場平遺跡です。馬場平遺跡は、多摩川の源流である柳沢川左岸の河岸段丘上、標高約1,256mに位置しています。また、現在の青梅街道と重なる地点であり、山梨と東京を結ぶ重要な交通ルート上にあります。

周辺には、馬場平遺跡のほかにも刑部平遺跡、と板橋遺跡の2遺跡があります。これらの3遺跡は、「武蔵野文化協会考古学部会」による刑部平遺跡のトレンチ調査及び周辺遺跡の踏査が実施されており(土井1978)、その成果から馬場平遺跡は旧石器時代の遺跡として周知されています。

令和元年度に実施した調査は、国道の拡幅とそれに伴う接続道路の付け替えが原因です。成果として、土坑・ピット45基、屋外土器埋設遺構1基及び水晶集中区を発見しました。

水晶集中区とは、包含層内から水晶製遺物が、多量に出土した地点のことを呼んでいます。約3m×1.5mの範囲に500点以上、総重量1.17kg以上の水晶製遺物がありました。ほとんどが剥片の出土でしたが、使用痕がある剥片と石鏃の未製品が見つっています。この水晶集中区から、縄文時代中期中葉の猪沢式土器が出土しており、この地点から出土した水晶製遺物は、この時期に帰属するものと考えられます。

甲府盆地では、山梨市の上コブケ遺跡と笛吹市・甲州市にまたがる釈迦堂遺跡群において、500点以上の水晶製遺物が確認されていますが、甲府盆地より東部域で500点以上の水晶製遺物が発見されたのは、馬場平遺跡が初めてです。なお、黒曜石も出土していますが、調査区全体で28点であり、水晶の出土量が圧倒的であることが分かります。このほかに、馬場平遺跡にいた縄文人がいかにか水晶を採取していたか分かることとして、遺跡全体での水晶と黒曜石の出土重量比を示します。上コブケ遺跡では約7:3の重量比で黒曜石が多いです。このほか、笛吹市横堰遺跡では約8:2の重量比で黒曜石が多いです。馬場平遺跡は、約9:1の重量比で水晶が多く遺跡の特徴と言えます。

土坑・ピットのほとんどが遺物を伴いませんが、新道式土器や水晶製遺物等の遺物を含んだ土坑が10基ありました。

屋外埋設土器は新道式であり、底部から胴部下半が残存しており、正位で埋められていました。地山から上部を欠損しており、後世に破壊されていると考えています。

このほかに、包含層内から縄文時代早期の繊維土器が見つっていますが、主体は新道式土器です。石器はチャート製の打製石斧や花崗岩製の磨石・叩き石類が発見されました。

石材の原産地推定分析を行ったところ、水晶は山梨県の竹森鉱床からものが約56%と主体となります。ほかにも少量ですが、山梨県内の八幡・向山・梓の各鉱床から産出されたと推定される水晶が認められたことから、馬場平遺跡には、様々な鉱床から採取された水晶が集まっていたことが推定されます。このことは、甲府盆地から多摩方面への水晶流通ルート上に馬場平遺跡が位置しているものと推定されます。黒曜石は、

28点すべて星ヶ台から産出されたものと推定されています。

馬場平遺跡において、石器石材に利用された石材を見ると、黒曜石と石鏃、チャートと削器、砂岩と打製石斧及び花崗岩と磨石・叩石類、台石といったように、石材と石器には、加工のし易さ・採取地からの距離などを考慮して適切に石材を選択していると考えられます。

ところで、馬場平遺跡は旧石器時代の遺跡として周知されていましたが、今回の発掘調査で検出された遺構・遺物は縄文時代のものばかりです。これは、塩山市史編さんの際に、埋蔵文化財包蔵地範囲の変更をしているためと考えられます。武蔵野文化協会考古学部会が行った調査の資料を確認したところ、板橋遺跡出土とされる箱には、今回発掘調査を行った地点であることを示す注記がありました。つまり、元は板橋遺跡であったところを調査したので、旧石器時代の遺構・遺物は発見されなかったと考えられます。

馬場平遺跡の発掘調査の結果、多量の水晶製遺物の発見がありました。甲府盆地から多摩・青梅方面へ抜けるこの地域では、発掘調査事例が少なくこのような調査事例は貴重です。また、水晶の交易ルートだけでなく、縄文時代の人々の移動や情報伝播を考えるうえで重要な成果であったと思っています。

今回報告した馬場平遺跡は、私が初めて発掘調査を主担当した遺跡です。発掘調査と整理作業の中で、できた事・できなかった事がありますが、馬場平遺跡での経験を活かして、発掘調査で得た情報が少しでも地域へ還元できるように、調査・研究に取り組んでいきたいと思えます。

参考文献:

- 土井悦枝1978「山梨県塩山市刑部平遺跡の試掘調査 - 多摩川上流域における縄文文化の研究1-」『考古学ノート』第7号 武蔵野文化協会考古学部会
山梨県2021「馬場平遺跡 - 一般国道411号御屋敷拡幅事業に伴う発掘調査報告書 -」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第328集

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは生山優実さんです。



▲馬場平遺跡空撮写真(山梨県立考古博物館 提供)

考 古学者の書棚

考古学研究調査ハンドブック②「縄文土器の技法」

可児通宏 著／同成社(2005)

橋口 豊

はじめに

今日、全国の博物館やその関連施設では体験学習プログラムが数多く考案され実施されている。考古学の分野においても火起こしや勾玉づくりを代表に、骨角器づくりや銅鏡づくりなど地域性を押し出した取り組みをしている施設が数多くある。体験学習は実際に素材を手にとってやってみることで、考古遺物をじかに触れる機会が少ない多くの参加者にとって、大昔のはるか遠くに感じていたモノコトがぐっと身の周りに近づいたように感じられ、また具体的な製作方法を知ること、対象への理解を深めることが期待できる。

今回の依頼を受けた日は、勤務先での縄文土器作り教室の焼成を翌日に控えていた(雨天により延期となったが無事実施できた)。そのような折に連絡を受けて、土器作り教室や土器作り実験のたびに読み返している本書について紹介できればと考えた。

本書の構成

「縄文土器の技法」は、1. 土器を焼く技術の発明、2. 土器作りの基本行程、3. 原材料、4. 土器の成形、5. 器面の仕上げ(整形)、6. 文様の施文、7. 器面の仕上げ(研磨・削り)、8. 乾燥、9. 焼成、10. 縄文土器の文様、11. 縄文土器はいつ作られたのか、12. 縄文土器は男が作ったものなのか、女が作ったものなのか、と12章で組み立てられている。1章は導入として土器の発生についての仮説を紹介し、2章以降10章までは縄文土器作りの工程に沿って多くの写真や図版を用いて記述されている。本書は、「はじめに」で述べているように「具体的な考古資料の観察を通して明らかとなった縄文土器の製作法についてまとめたもの」(3ページより引用)となっている。胎土はどのように作られているのか?施文の種類は?など、縄文土器作りにつまづいた疑問について、考古資料の精緻な観察と研究成果に基づいた見解や事例を確認できることが、土器づくり教室や体験学習の際に何度も読み返している理由のひとつである。

終盤の11章および12章では縄文土器や考古資料の観察、民族・民俗事例、研究者の仮説を紹介し、縄文時代の人々の生活のあり方や社会について迫っている。

縄文土器の製作法を明らかにすることとその意味

本書で最も重要な視点は「はじめに」と「おわりに」で述べられていると感じる。「はじめに」ではまず縄文土器の製作法に迫るアプローチとして、「①縄文土器を多数かつ詳細に観察して、その製作法を明らかにしていく方法、②実験考古学の手法を用いて、縄文土器と同じものを実際に作ってみるという方法、③世界各地の土器作りに関する民族誌を参考にして、縄文土器の製作方法を推定していく方法」(1ページより引用)の3点を挙げている。著者は「縄文土器の研究は縄文土器そのものの研究から出発すべきであると考えているので可能な限り多数の縄文土器を観察し、土器の表面や裏面、壊れた破片の断面などに認められる製作法に起因すると見られるさまざまな痕跡から土器の製作法

を明らかにしていく方法をとっている」(1ページより引用)とし、①の立場であることを表明している。よって本書は前述したとおり「具体的な考古資料の観察を通して明らかとなった縄文土器の製作法についてまとめたもの」となっている。

その上で著者は①の研究成果と②の実験考古学の方法による成果に違いがある点を指摘し、原因が何かについても「実験考古学による研究では粘土の採取から焼成までの工程を実際に体験しながら行っているため、どうしても実物によく似たものができるが、縄文土器の製作法とはこういうものであり、こういう方法で作られたに違いないという、具体的な考古資料による裏づけを欠いた実験の場だけの結論ができあがるのではないかと考えられるのである」(2ページより引用)と記している。これは製作実験・体験学習を行う際には常に頭に入れておかなければならない重要な示唆である。また著者は上記の理由から縄文土器作り実験や体験学習において「縄文土器は果たしてそのような方法で作られていたのか」(2ページより引用)と疑問を呈している。ただ、縄文土器の製作法は現状考古資料のみで全てを明らかにできない点、実験製作の利点についても述べている。

縄文土器の製作法をより確からしいものとして検討するには、著者が述べている①～③全ての方法論を駆使しなければならないのであろうが、果たして自身それができているのか常に心にとどめておきたい。

「おわりに」では縄文土器の製作法を調査・研究することの意味について「土器の製作法についてことさら関心を持つのも、この製作法の研究が単に技術論にとどまるものではないと固く信じているからである。(中略)縄文文化についても、この「土器製作法」を望遠鏡や顕微鏡のような装置に見立てて縄文文化を見れば、少しはその姿を見せてくれるのではないかと考えている」(150ページより引用)と記し、縄文土器の製作法から縄文文化を明らかにすることへの展望を述べて本書をしめくくっている。本書の11章・12章はまさに著者が「おわりに」で述べたことの実践であったと考えられる。

おわりに

未熟ながらも実験や普及事業として縄文土器(に限らず考古資料)の製作を行っている身として、縄文土器製作を行うにあたって、工程ごとになぜその作業を行うのかについて、根拠を考古資料に求めることの重要性を繰り返し強調している本書は、「そのやり方で多くの人に説明ができるのか?より良いプログラムが組めるのか?しっかりと考古資料にあたっての判断なのか?」ということを常に考え続けなければならないことを思い出させてくれる1冊である。そんなことから購入以降、作業机の上に置き続け、必要な際は事例の確認のみならず「はじめに」と「おわりに」も合わせて読むようにしている。

アルカ通信 No.224

発行日 2022年5月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp